

# 新井白石の性格と感情

——『折たく柴の記』を通じて見た——

宮崎 道生

## 序

人間白石を端的に印象づけるのは、ひろく世上に流布した肖像画であらうが、さりにそれに加へられた白石自身の賛と、高玄岱の賛とによって白石の性格はほぼ把握し得るといへよう。すなはち、白石自身の賛は、余りにも有名な七言絶句、

蒼顔は鉄の如く髪(髭)は銀の如し

紫石稜々、電、人を射る

五尺の小身、渾て是れ胆

明時何ぞ用ひん、麒麟に画かるるを

であり、また高玄岱の賛も、

皆閑の火の字、耳辺の白毫、両目流光、鐵礮一機

宛変縦横

といふ一節はよく特徴をとらへたものと認められるし、

その賛に引用された朝鮮正使趙秉億の詩

日出の邦、源大官

骨清く氣は豪に、身は桓々

胷中の壯略、龍虎を批し

云々、もまたよく知られたところであるが、やはり白石の人と爲りを詳しく知らうとすれば、その著作によるほかはあるまい。しかして、その著作中、最もよくその人柄や感情の動きを反映し伝へてゐるものは、『折たく柴の記』であるから、以下本書に拠りつつ白石の性格と感情との究明を試みて見たい。

## 一 白石の性格

ギリシヤの昔、アルフォイの神殿の扉には「汝自りを知れ」といふ言葉がぎざまれてゐたと言ふことで、自らを知ることの困難は昔も今も変わらないと思はれるが、しかし、人間も高齡に達すると自分自身の性格や能力について、かなり公正な判断が出来るやうで、白石の場合も、折たく柴において自らの性格につき語るところがある。すなはち、父の教訓「男児はたゞ事に堪ふる事を習ふべき也」を述べたついでに、

「我八九歳の比より、常に此事によりて、力を得し事も多けれど、もとより我性急に生れ得しかば、怒の一

この爲で、堪がたき事どもありき」(誠辨新注<sup>二</sup>紫<sup>一</sup>)  
とあるものがそれで、「性急」の厄の怒り易い点を短所  
として自覚してゐたこと明かである。こゝにふ性格から、  
若き日には人と口論してのつびきならぬ状態に陥り、一  
再ならず死を覚悟したらしいことは、河村瑞賢に語つた  
「人と申ぶんなどいたし、死を覚悟候事二三度有之」  
(小訶<sup>一</sup>)などによつても窺知されるところである(同上  
頁、三三)。

この「性急」は、他方俊敏にのつなると見られるもの  
で、例へば、家宣が五代將軍綱吉の世子として西の丸入  
りをした時にとつた行動など、最もよくそれを示すもの  
であらう。すなはち、いふ

「甲申の年(宝永元年)十二月五日に儲副に立せ給ふ  
と聞て、馳せ賀し申さむため、竜口のほとりに及びし  
時、程なく西戒に入らせ給ふべしとて、道ゆく人をと  
ども。(中略)藩邸に至るに……詮房朝臣……坐をた  
ゝれしを引とめて、凡天下の御事におゐては、某此  
年比申せし所なれば今は申すに及ばず、たゞその申  
せし事共を忘れさせ給ふ事なからむには、天下の幸甚  
にこそ候べけれと、此一言を申すべきため馳参りて候  
也、此由を以てもらし申させ給へ、といひて、左ちわ  
かれぬ」(秋義<sup>一</sup>)

こゝにふ俊敏さは恐らく母からうけたものと思ふが、そ  
の反面、気宇宏大であり、剛毅でもあつたことは——こ

の方は父からの遺伝と見るべきか——、序に引いた自画  
像の賛などによつても推測されるばかりでなく、折たく  
柴の次の記述もまたそれを裏書する。前者の気宇の大き  
かつたことについては、家宣の白石評「其氣のごときは  
我國にみちあまりて四海の外をおほへり」があり(三三)  
後者の剛毅については、朝鮮使節と争論した時、また幕  
閣隨一の剛の者、勘定奉行萩原重秀を弾劾した時の態度  
などがそれを示す(秋義、三三)。朝鮮使との争論につ  
いては、

「すでに賜宴の日に至て、假使等、殿上の座に就きし  
後、某と此礼を争ふ事時うのりしかど、つるには其詞  
屈して、仰下されしごとくに礼畢りぬ」(三三頁)

「其國諺<sup>一</sup>しめまいらせむ事は、……我かねてよりお  
もひ合せし事共あれば、我もまた死を誓ひて、初の一  
とばを改めず」(三三頁)

と記してゐるが、これは既引の趙素億の語「骨清氣豪身  
恒々」とも照應する。萩原彈劾の方は、家宣が「才ある  
ものは徳あらず、徳あるものは才あらず、真材誠に得が  
たし」と言つたのを反論して、「重秀がごときは、才徳  
ふたつながら取るべき所なし」といひ(三三頁)、再三意  
見を上呈してやまなかつた態度がそれで、この時は余程  
激烈であつたらしく、

「我言の激烈なるを聞召驚かせ給ひ、明れば十一日の  
朝に、詮房朝臣、仰を奉りて重秀職奪はれし由を告給

ひたりけり」(一〇三頁)

と記してゐる。

その他、こゝにいふ直言して憚からぬ態度を思はせる記事は幾つもあるが、白石自から親友の望鳩巢に語つたところでは、まだ將軍世子時代のことではあるが、散へ猿(一)能楽についてその観覧を諫止した際は、さすが寛厚な家宣も非常に腹を立てたらしい(一〇三頁、一〇六頁、一〇七頁、一〇八頁)。但し、折に柴には「御代しろしめされし後に至て、散衆御覽の事は聞えしかど、某をめされし御事はつゐにばかりき」と記すのみである。

剛毅の性格は、行動や事業においては英断・直截となつて現はれるけれども(湯淺常山の「文会雜記」には英断の人として幾つかのエピソードを記載してゐる(一〇三頁、一〇四頁、一〇五頁)、対人関係においては我の強い人間、傍若無人といふやうな印象を与えることになるので、幕閣では「鬼」といふニックネームで通つてゐたらしいし、鳩巢のやうな最も深く白石を理解した人物でさへも必ずしも好感をもたず、白石が往々にして人の論を反駁したり、押へようとしたりする態度を「新井氏氣くぜ」といひ、「氣象の弊」と批判し(一〇三頁、一〇四頁)、さらにはその豪邁の氣が學向に禍して「聖人の學とは一嘆へだたりたる」と思はれるとまで評してゐる(一〇四頁、一〇五頁)。

此の自然の強さは、また自尊心の強さにも通ずると言へようか。もちろん自尊心は誰しもが抱いてゐるもので

あるが、白石の場合、儒者的自覚と武士の意氣地とによつて裏打されたと見られるだけに、非常に強い現れ方をしてゐるやうに思はれる。しかして、これは相手の不快反感を誘発するおそれのあつたもののやうである。例へば、土屋家の内紛に際して、利直の勸氣を受けて籠居中であつたにもかかわらず、父の同志の側に味方して戦はうとした時、友人の賛成——籠居の身ではそれは適當でもなければ罪深いことではないか、といふのに答へたことを敘して、「我此言を聞て、打わらひて」云々と述べてゐるところなどに、さういふ狀態が認められるし(一一頁一)、或は學敵林大学頭信篤の無識を笑つたこと(一一六頁一)、さらに日本国王号問題で白石を批判した学友兩森若洲や松浦霞沼らを「対馬國にありけるなま学匠等が」云々と敘して輕蔑的口吻をもらしたこと(一〇三頁)等においても、それは窺はれる。家宣が西丸入りをした時、旧甲府家の同僚たちが就職運動をしたのに對し、白石がじつとして動かずかつた態度なども、同様自尊心の現われ——もう一つは儒者としての矜持——と見られるが、もし此の場合は、自分一人だけ出仕を願ひ出ないのでは僞慢の嫌があるかも知れないと気づき、人を介して意中を上申して貰ひ、疎略にならぬやうに依頼してゐる(日記、宝永二年正月元旦の条——一〇三頁、一〇四頁)。

剛毅と言ひ、自尊と言ひ、これらの現はれ方が上述のやうに必ずしも良い印象を与へないのは、その相手が白

石と同等もしくはそれ以上の立場の人たちの場合で、つまり強き者に対しては強烈な形で発出すると見られるのである。但し、その反面、謙遜・弱気なものは感傷的でさへあつたと見られる場合もある。例へば謙遜の例としては、防火隊十五条の建議にあたり、「人々に此事向はせ給ふべき御事、勿論なり」と申し述べたことがあり（三三頁）、弱気を示すものには七代將軍家継の時にまつてからの致仕申請などがあり、向部詮房から、老中たちも白石の留仕を望んでゐると聞かされて、「はからざる外の事を承るものかな」云々と記してゐる（三四頁）。感傷的といふのは必ずしも適切ではないかも知れないが、例へば、朝鮮使との激しい争論の後、致仕を申し出たのに対し、家宣の慰留の言葉が伝へられた時、「竟えず涙にもど」んだとき、或はまた家宣の最後の（死期に近い）時の一語に接し、「たゞなきになした」とき（共にのち再述一才二節）はそれに当るものであらう。ところが、それが同等以下のもの、弱き者に対する場合には事情は自からまた別だつたやうである。公王で、思ひやりが深く、涙もろい等々、全く別人のおもむきがある。すなはち、金銀復古（改良）に當つて大阪の商人谷安殿の意見なき、それに従つて自らの立案に修正を加へたが、その時、谷にむかつて言つた言葉は、「我ごときものゝしれるにはあらす」云々といふのであつた（三四頁）、不幸な農民の裁判に當つては、それぞれの立

場や状況をよく調査し理解し、満腔の同情を寄せてゐるのである。父と兄との争ひにかかつて夫が横死した武藏河越庄の一女性に対して其の無罪を主張した時の判決家では、「哀々たる寡婦、すでに其託する所を失ふ」といふ言葉が用ひられてをり（三四頁）、火災の時逃去した罪人に対しては苛酷な刑罰の適用を不当として、「誠にあはれむべきことにこそあれ」と言ひ（四五頁）、少年の誘拐・少女の人身売買事件の審理にしても、人の親としての感情の働きも手伝つてゐるやうが、行届いた觀察がなされてゐる。前者の場合、少年の保護者（実父ではない）道三が未決囚として死んだことにつき、「故なき事に客死せしこそが可しけれ、いかにこれらのあはれをばしらぬ人々にはあるらむ」と述べてゐるのである（四五頁）。或はまた、越後國の強盗謀殺事件の再審査要求にしても、無実の罪に向はれようとしてゐる一庶民への同情が記述全体をつらぬいてゐる感じである。思ふにこれらは、主として仁徳を重んずる儒學的教養が然らしめたものであらうが、やはり白石が天性、仁愛の心には恵まれてゐたことによるものでもあらう。しかして、若き日以来、市井にも住んで生活の苦難をなめつくした体験が、それを助けたこともあらう。なほ、しもべ（下男下せ）をいたはつた両親の家庭における無言の教が、白石に影響を与へたであらうことも見落されてはなるまい（一秋藤参照）。今日では、白石は孝者としてその真価が認められてゐる

るから、さういふ観点からすれば、余ほど理性的であるやうに受取られがちであるが、實際は感情の豊かな人であつたと見るべきであらう。多感であればこそ、當時は詩人として高名であり得たのであり、すぐれた詩のみならず、蓬翰譜のやうな文学的に見ても傑作とされる作品が書けたものと思はれる。後述する通り、折たく柴の記にしても、その筆致は實に見毎で、叙述の向に感情の動きが活々と現はれ出てゐる。

## 二、白石の感情

よく知られてゐる通り、一般的に言つて武士は意志の鍛錬にうとめ、感情はななるべく抑止することを信条としたから、白石の場合も現代の我々から見れば、その表出は余ほど控へ目であつたと思はれるが、折たく柴の記を読む時、「天性、喜怒哀の色あらはれ見えたまはず。笑ひ給ふにも声高くわらはせ給ひし事は覺えず」云々（一頁三）と記された父にくらべれば、白石の方はかなり感情が外に現はれてゐることを思はしめる記事が少なからずある。すなはち、いはゆる喜怒哀楽の情が直載に現はれ出てゐるのであつて、露は左筆致で述べられてゐる箇所がかなり多い。なかんづく特徴的なのは笑であつて、既述の通り自尊に結びつくものが多いが、照れ隠しや困惑を示すと認められるものもあつて興味が深い。照れ隠しといふのは、元禄十六年の大地震の際、火難をおそれて大

事と書籍を塗籠から取出して坑に埋めておいたところ、元の塗籠が無事で坑の方が却つて危険であつたことを救つた部分で、「さらばはじめ坑うがち、書おさめし事は、徒に力を勞せし也けり、といひてわらひぬ」と記したものの（一六頁）、困惑を示すのは、雨森芳洲と口論して言葉に窮した時のことで、「此人の口給をもて人にあはれる事をば我よくしりぬ。またいふこともなくて打わらひて、そありける」と記してゐる（一三頁）。王号採用問題の際といひ、此の際といひ、芳洲は白石にとつてどうも苦手な人物であつたらしい。

次に、一応いはゆる喜怒哀楽の區別に従ふならば、その中では哀・悲哀の情を述べた部分が折たく柴には割合に多い。これは逆境や肉親の死に遭遇してのもの、主君との關係におけるもので、心中を述べたにとどまるものと、動作や表情にあらはしたものとがあるが、前者は父の假界に遭つてのもので、「此年我つかへにし左がひしより（堀田正俊への出仕）、わづかに百日にもたらずして、わかれまいらし事のかなしけれど」（一九頁）、浪人生活と母、妹の死に遭遇した際のもの、

「此のちは老給ひし父と我と、たゞふたりにのみなりぬれば、よろづ物悲しかりし事共、いふは（ば）かりなし」（一四頁）

父の友人、住倉了仁によりて養子縁談がもちこまれた時、それを拒否する氣持を文に打ち明けた時のもの、「かく

わびしく渡らせ給ふ事を見まいらするに、いかにかなしくは寛文侍れども」「かく悲しく思ふ事も、武士の家に  
出てつかふる事の、かなはざる故に候ものを」(一六頁)  
等である。後者は、主君土屋利直の勲氣にふれて塾居を  
命ぜられた時のことで、つぎ父の怒にふれたものと  
考へて、「封面をばゆるし給ふまじけりと、此事をか左  
しく慰ひしに」と述べたもの(一一頁)と、將軍家宣の病  
氣および逝去に際してのものとである。既述の通り、家  
宣に対しては、面を冒し直言して憚らなかつたのであ  
るが、さすがに病重く直言に類する語句にあづかつた時  
は、その悲しみを抑へ得なかつたと思へ、家宣が「な  
らむあとの事共、おもひ定め、けふの事共、程なく病  
より起ちしの中に、おもはじ事共、おもひにけりといひ  
て、わらひぐさこそすべけれ」といつたのを聞いて、  
「我はたゞなきに左きて」と述べたものがその一(一三頁)  
一、家宣の命により試作された國產品としての織物が京  
都から届いた時には、家宣が既に亡くなつてゐたことを  
述べて、「常世の橘もとめまりし時の事、おもひあはせ  
ていと悲しかりし事にこそありけれ」と言つたものがそ  
の二(一五頁)一、家宣の葬送につき従つた時のもの、「哀  
眼左といふ事は、其例なければ、人々衣冠に拍ばさみ、  
黒作の太刀などはきて、御供にさぶらふ。我もまた其数  
にもれざるも悲し」とあるのがその三である(一七頁)。  
以上は、はつきり「悲し」と表現したものであるが、蛇

曲に悲しみの情を述べたものは他にもある。

悲哀について挙ぐべきは、怒であらう。これは悲哀の  
場合とは違つて露骨な表現はしてゐないが、明かにそれ  
と認められるもので、さきに引いた兩森芳洲・松浦霞沼  
等の文論を心外として、「封馬園にありつるなま字匠等  
が、知るにも及ばで」云々と述べたのをはじめ、同じく  
朝鮮聘使に關係したもので、國論の問題をめくり白石の  
やり方が幕閣の要人らによつて激しい批判非難にさらさ  
れた時、「いかにかくまで、我國の耻ある事をしれる人  
なき世とはなりぬらむ」云々と思ふて辭職を決意したこ  
と(一三頁)一、正徳の年号を不祥なりとし改元を進言した  
林信篤の行動をさして、「阿の曲学阿世の故智によりて、  
ふたゝし時にあふべき事をこひねがふ甚計に出しとぞ見  
えたる」と言つたもの(一四頁)一、等がそれである。才三の  
ものは、怒といふよりもむしろ憎悪といつた方が適當か  
も知れないが、これと同様のものには、政敵萩原重秀に  
ついて述べた幾つかのくだりがある。すなはち、萩原の  
羅免の事を叙した後、「此人すでに黜けられ、いくほど  
なく身もまた死したりけれど、其の余毒天下に流及びし  
事、いづれの代に除き尽すべしとも寛文す」、「天地間  
闔けしより此かた、これら姦邪の小人、いまだ闇きも及  
ばず」といつたもの(一三頁)一、また萩原の收賄の事実が  
暴露されて關係者が処罰されることになつた時、萩原の  
息子の罪の軽減を主張した論——これは白石がいに私

情にとられぬ公正な心の持主であつたかをよく示してゐる——の中で、「たとひ死せしもの、ものしる事ありて其冷かなる肉を寸断せらるゝとも、重秀が悪鬼のごとき、なにの痛苦をばしり候べき」云々と述べたのが「一四一」それである。因みに、司法関係事件の中には、詐偽や不正をにくむ氣持が筆端にあらはれた部分も幾つか見られる。

残る二つ、喜と衆について、折々。紫は露はな表現を以てはそれらを記さない。先づ喜の方から見ると、むしろ得難い恩寵や機会に恵まれたことによつて、感激した場合がこれにあてられて然るべきかと思ふ。すなはち、既述の国譯論争のあと致仕を申し出た際、家宣から扇曲の言葉が伝えられたが、その中に「仏氏の説に一身分身とかいふなるは、我と彼との事也」とあつたのに感激したもので、「あまりにかたじけなさに、寛えず涙にむせびぬれば」と述べた場合（「一四〇」）と、將軍の命により上京して中御門天皇の御元服の儀式を拜観した際のもの、「此日、まぢかく竜頭を拜しけるこそ、ありがたき事なれ」と述べてゐるが（「一四一」）それである。他方、衆については、折々。紫にはそれと認むべき箇条はないやうである。白石の生涯——致仕以前——において衆しかつた時期が皆無であつたとは言へないと思ふが——何えは本門の友人と相会して詩を詠み文を論じた際のごとき——、少くとも本書中にはそれらしいものは見当たらない。

いま喜怒哀楽的感情のとりへ方を離れて、白石の感情の動きを折々。紫中に求めるならば、かなり多方面のものが認められる。安堵・不安・驚愕・慨嘆・慚愧・焦燥等々、多彩であり、その他白石の豊かな人間味や謹厳な姿勢を推測させ、ほうふつさせる記事などもある。安堵の例では、既述の元禄十六年の大地震の際、主君綱豊の安否を気づかつて桜田の甲府藩邸へかけつける途中、火災が御殿に及んでゐないことを確認した時のことで、「藩邸の北にある長屋のたふれて火出しにて、殿屋にははるかに隔りたれば、胸ひらけい心地す」と述べたもの（「一四一」）これに對して不安の情を示すものは、既述の致仕申し出に對し、將軍の御召があると間部詮房から聞かされた時のこと、「いかなる事の出来ぬらむと寛束なかりしかば」である（「一四〇」）。驚愕の例としては、五代將軍綱吉の死を知つた時のもの、「誠にきもつぶるゝ事にてありけれ」（「一四〇」）、慚愧の例としては、既述の元禄大地震の際、家を出るに當つて用意した紫を忘れたことにつき、「かの紫の事をばうちわすれて、はせ出しこそ、耻しき事に覺ゆれ」といつたもの（「一四一」）、慨嘆の例としては、幼主服喪につき白石の心裏説に屈服した林信篤（無服を主張す）の孝問の粗雑を指摘したのち、「あはれ我國の孝の衰へにし、かゝる事にも至りぬるか」と述べたものがあり（「一四一」）、焦燥の例としては、大地震の時、藩邸へと急ぐ自らの歩みののろいことを述べて、

「心はさきにはすれど、足はたゞ一所にあるやうに覺りし」と言つたものがある（三回）。なほ、変事中の少康、忙中の兩とでもいふべき心境を示したものとて、「心いづかに家に歸りぬれば」（大地震の時、五回）、或は「しばしがほとは、此所にとゞまり居て、心いづかにふるきあとも見んずるとおもひしに」（上京の際の奈良訪問、二回）などが注目を引く。ほかに、同情を示したものが少なからずあるが、これは既に前節で述べたところであるから省略するとして（あらはには言つてゐないが、横死した奈良奉行三好備前守、自決した安村喜右衛内についての記述は、白石の同情が行向に読みとれるものである（四回）、ここで附説しておきたいのは、白石の人間味をよく示した皇子皇女御出家廃止の建議中の次の一節である。

「しかはあれど、儲君の外は、皇子皇女皆く御出家の事におゐては、今もなをとおろへ代のさまに、かはり給はず、凡は匹夫匹婦の賤いきも、子を生ては、必らず其皇家あらむ事を思ふ、これ天下古今の人の情也」云々（九回）

また、家康の正室であつた南明院が忘れ去られた形になつてゐるのに対し、

「今は朝夕の御供をたに、はかしく進らすべき便もなき少院のうちに、其御像のみのこらぜ給ひし御事の、いとかなしく覺えて、おぼえぬ涙をそ催いたりけ

る」

と述べ（一回）、供米田寄附を家宣に進言した態度なども、同様、白石の心の温かさを示すものであらう。

このやうに、白石は一面涙もろいところがあり、善意や好意に対しては感激しやすい性情であつたのに対して、悪意や冷たい仕打ちには強く反発したらしく、また家宣が將軍世子となつて面もない時期のことであるが、村田十郎右衛門・吉田藤八郎の二人を小納戸衆に召加へたのに対し、白石が元のままであつたので、周囲の「今までしたしかりしも」「うとくなりしもすくぢからず」といふ状態であつたのが、その後十日ばかりして白石が家宣から破格の恩寵をうけるに及び、「此ほどうとかりし人々も、またまり賀したことを記したあたり（一回）、人々の態度の変化、ことに前の冷たい態度が自尊心の強い白石には、忘れがたいものであつたことを思はせる記述として注目を引くところである。

ともかく白石は、理性的であると共に多感であり、また神經質な一面もあつたやうに思はれるので、仔細に見れば、上記のもの以外にもそれらを証するものがあらうと思ふ。なほ、白石が感情の強い人であつたことは、「なきになく」（三回）、「あきれにあきれ」（四回）などの表現に徴しても知られることであり、また他人の感情を叙するに巧みである点なども、その傍証とならう。



## 餘論

山路愛山は、名著『新井白石』において白石の人物を評して、

「彼は周囲に化ぜられずして、寧ろ周囲を征服せんとせり。彼は生るゝより死ぬるまで自己の意志に因つて歩み、自己の意志に因つて止まり、少しも世に染まることなし」(『史論集』)

と言ひ、また、彼れは一生を通じて世と戦ひ、人と調和せず、「孤筈萬山を渡るの概を以て超然として世上を踏歩せり。而して未だ嘗て一たびも自己の驕面を屈するることなかりき」と言ひ、さらに「彼れは生れながらにして大なる人なり」として、その理由を精密な記憶力・不倦不屈の執着力・鋭敏で事物の最下層に透徹する觀察力・勃々たる野心等に求め、「彼れは自ら自己の運命を造りしかば人の助を必要とせず、一言にして曰へば彼は治世の項羽なり」と言つた後、望鳴渠以下の諸友の批評を引き、救生徂徠との比較に及んで、次のごとく白石が孤立の人であつたことを再度確認してゐる。

「彼は白眼にして世上を觀、心を師として他を顧みざりしかば、其好敵手たる救生茂卿の如く世を動かす能はず。彼は天下の爲めに動かされざりしかば、天下は彼れの爲めに動かされず。救生は天下の爲めに動かされしかば、天下も亦彼れの爲めに動けり。(中略)徂

徠は人才を愛惜す。新井氏の人才を見るや、棘ぢ其己に如かざるを憫る。救生は才の爲めに才を愛し、新井はすべて之を己と比較し来る。救生は何人をも朋友となし、新井は何人をも隸屬となす。」云々(『史論集』)

さらに愛山は、白石が徂徠の有しなかつた所を有するものとして、「何処にても自己の主人」であり、自力をつくして「自己の運命を闢」いた点をあげ、「此点に於て彼れは優に英雄の域に入れりと謂ふべし」と言ひ、直接に世を動かすことは多くなかつたが、「然も汚点なき一生涯を以て尙持て天下後世を訓へたり」として、新・救二家は「容易に輕すべからざる」存在であると述べてゐる。なほ愛山の觀察として附記すべきものに、白石は「餘りに自律に過ぎた」人で、何となく親しみにくく、その品性(「大なる品性」)において善しい点は「愛憎の念」で、「睡眠の怨も必ず報ゆる人」であり、「人の過を恕する能はず、恕しても之を忘るゝ能はざる」点において、徂徠が「清濁併せ呑むの雅量」を有してゐたのと異るとしたものがあつた。その他、「何事にも全力を用ふるの人」である、とか、或はまた勤勉で精進なる事務家といふ点では「ラテン」人種よりも寧ろ多く「アングロ・サクソン」人種に似てゐる、といふやうな興味ある批評をも加へてゐる。

愛山の指摘した通り、白石は徂徠とは異なり弟子をもたず荒派をも立てなかつたので、孤立独行型であつたと

思はれるが、また近衛基熙が「儒士として主角なきに非ず」(『証言録』)と言つたやうに、<sup>(6)</sup> 君子的風格はもたなかつたけれども、しかしそれだけに却つて、寛容な主君家宣や温厚な師の順庵、さらには道学的な鳩巢等とウマが合つたと見られることである。これらについては、すでに近著において比較的詳細に述べたことであるから、<sup>(7)</sup>

いま再説を避けるが、その強烈な個性・野人的な一面は最後まで失なはれることはなかつたとは言ふものの、すぐれた主君や両親・得がたい師友に恵まれたことにより、氣負の偏りがかなり矯正されたこともまた、事實であらう。これに加ふるに、儒学からうけた感化や、苦難にみちた生活体験が手伝つたこともあり、晩年の白石は相当に円満な人格に成長してゐたと思はれるので、上述の私見は——析たく柴を通じて窺知した——晩年にはそのまゝには当はまらぬところがあるかも知れない。論じ残したところ少くないが、一先づ此の試論を終ることとした。

#### (註)

(1) 教科書その他に収載されて一般によく知られてゐるのは、高玄岱の贊のある朝鮮使節迎接の際のもので、武官の服装をした肖像画であるが、この他に文官姿のものが新井家に伝わっている(「筑後守正装」、拙著『新井白石——至文堂——巻頭写真および新井白石の研究』四八。六頁、参照)。

(2) 拙著、昭和三十九年六月、至文堂刊。

(3) 白石がローマの使節シンドラの眼に大物として映じた様は、西洋紀聞中の一節、「我方におはしますむには、大ぎにする事なくしておはすべき人にあらず」がよくそれを伝えてゐる(『岩波文庫本『西洋紀聞』二三頁、拙著釈義一三四九頁、参照)。

(4) 白石の仁愛の心情を推測させる一つは、越後国村上領の百姓等の出訴事件に當つて、実情調査のため將軍の特使を現地に派遣すべきを進言した際の言葉、「此御使の事仰蒙らむ人は、いかにも溫柔にして哀れある人を候はるべきに候」であらう(『釈義』三三八―三九頁)。

(5) ときに挙げた、勘定中の土屋家の内紛に際しての笑、或は新令(宝永武家諸法度)起草に關連して林信篤の無識を笑つたこと等のほか、谷某の転師勧告を斥け置いたものの「はじめのほどは打わりひてのみありしを」にも、同様、自尊の心理が看取される(『釈義』一四六頁、参照)。

(6) 將軍家宣の臨終を叙した部分の一節、「それぞ二十余年がほど、日々に見えまいらせし事の限りなりける」などがそれである(同上、三八―三九頁)。

(7) 三宝院内主の訴訟、増上寺の申状など(同上、四七―四九頁、四九二―四四頁、参照)。

(8) 小笠原佐渡守の落派(同上、二三七頁)、將軍家宣の喜悅(二三九、二四八頁)、林信篤の康慮(三一〇)。

頁）、林信篤の魂胆（三一八頁）、荻原重秀の傲語（三七〇頁）等。

⑨ 孤立独行型とはいっても、人との接触を嫌ひ避けるというような消極的態度はとらなかつたのである。後年の述懐、「少しも名のたかき人ニ出合ひ申さぬハ大かた無之候哉」がそれを示している（「金銀吹替竜見書草案」一）萩義、一三二・六〇八頁、及び拙稿「白石と瑞賢」一日本正史二〇一号、七〇頁、参看）。

⑩ 近衛基熙は、他方では白石が不世出の偉材であることとを十分に認めていた。萩義一二六五頁、及び拙稿「新井白石と近衛基熙」一日本正史一五三号、七五頁、参照。

⑪ 萩義、補説十二一五八五頁参照

⑫ 同上、余説 晩年の白石一六〇六頁、参照。

#### 〔補論〕

本論で述べたところは、折たく。柴の記の記事を拠り所としたものであつて、必ずしも十分とは言へないので、ここに白石の他著西洋紀聞およびいはゆる「鳩巢諫書」（兼山秘策所收）室鳩巢書簡に拠つて、一二補足を試みた。

本論中、性格について述べた部分で後、誠を挙げたが、この点を指摘した一人がシドチで、西洋紀聞には「敏捷におはし候」と評したと記してゐる。即ち、シドチが白石及び加支丹奉行らの前で、オランダ戦艦の窓から出た

大砲の説明をした時、通訳がその難訳に困つてゐたところ、白石が左手の指の向から右手の指頭三つを出して見せたので、通訳にむかつて右のごとを評語をのべたといふものである。もう一つ、シドチの批評として注意すべきは、註（三）に引いたやうに、白石を大器とした点である。これは、白石がオーストラリアへの距離を尋ねた時、答へなかつたので、再度たづねたところ、わがキリシタン教法においては、殺人は大禁である、どうして直のりを教へて他國侵略を企てさせることができようか、と言つた。これに対し、意味を諷しかねた白石が通事にその理由をたづねさせたのに答へて述べたのが問題の評語で、「此ほど、此人を見まいするに、此面におゐての事は存ぜず、我方におけしまさむには、大きにする事なくしておはすべき人にあらす」であつた。マルクハルトは、イタリア人は人の特徴をとらへる点ですぐれた能力をもつてゐる、といつたが（「イタリア・ルネッサンスの文化」）、シドチの場合においてそれは更に適切であるといへよう。

これもまた、西洋紀聞に見えるところであるが、白石の剛毅な性格にかかはるものとして強引で高冠車な一面がある。シドチ取調の行なはれた時は丁度寒い季節であるから、幕府側で餘分に衣類を与へようとしたところ、今のままで十分であることわつた時、白石は、これに先立つてシドチが、昼間はともかく、夜は「手かし足か

し」をはめて獄中につなぎおき、監視の役人方に「夜を心やすくぬかれ候やうに」はかりうていただきたい、と言つた言葉を取り上げて、先づ「此のものは、おもふにも似ぬいつはりあるものかな」ときめつけ、「奉行の人々も、おほやけの仰をうけて、汝を守らせ給ひぬれば、汝がいかに事故なからむ事をおもひ給ふが故に、衣うすく、肌寒からむ事をうれへて、衣給らむとのたまふ事、度々におよびぬ」といひ、それなのに衣類を受けようとしないうの態度は、奉行以下の方々に心配をかけたくないと言つたさき程の言葉に反するではないか、と述べ、結局シドナに衣類を受けとらせたいのがそれである。その鋭い論法といひ、高飛車で強引な態度といひ、いかにも白石らしいが、ここで見落してはならないのは、かういふ外見に似ず、内に温かい心情が秘められてゐることで、恐らくは白石の本心を感じ取つたことから、シドナが前言を撤回して衣類を受けることにしたものであらう。因みに、シドナが白石の言葉に従つたことを叙した後、「奉行の人々も、よくこそそのたまひ給ひつれといひて、悦びあへり」と記してゐる。

次に室鳩巢の觀察・批評であるが、「鳩巢諫書」(正徳二年十一月)の方から見ると、白石を以て右と同様豪傑とし、剛鋭果敢の氣盛んなりとして

「吾兄の豪傑なるを以て胸中に帶芥はかりもせざるへし。……只、磐根錯節、判刃にのかるゝ事なくして、

破竹の勢あるによつて、其詞色の向、自ら剛鋭果敢の氣盛にして、謙退抑損の心少し。」云々(白石金鑑大)と述べてゐる。さすが鳩巢は白石の親友として、その附き合ひも長かつただけに、穿つた觀察と思はれるが、ここに「謙退抑損の心少し」とあるのと相通する評語として、「傍若無人」といふのが青地兄等宛の書簡中に見えてゐる。即ち、白石が青年時代に俳諧に熱をいれて芭蕉などとも競り合つた、と語つたことを述べた手紙の中で「ク様の饒どん／＼と咄候て被致大笑候、傍に人なき様に見へ申候、この人の氣象に似申もの無之候」(本室遺書②)といつてゐる。さらにまた、「斬井氏氣くせ」といふ云ひ方で、「心に尤と存候ても、先は人の申儀をおさへ候て争被申候」と証したものもある(同上書頁)。鳩巢から見れば、白石のかういふ氣象は、長所であると同時に短所でもあつたわけで、

「此氣象にて学に入被申候事、得がたきものと存候、但氣象の弊は今に有之様に奉存候。……恨らくは義理の精潔なる處、体認の功平生なく候故、聖人の学とは一蹊へだたりたる様に覺へ候」(同上書頁)或ひは

「其身は憂舊に候故、經書の大義は明に候得共、精密なる事はいかに可有之候哉」(同上書頁)といふ感想となつてゐるのである。(昭和四十年正月稿)